

# 「信仰によって生きる」

ガラテヤの信徒への手紙 3章1－7節

森島 牧人 牧師

今日の聖書箇所には、＜律法の呪い＞という興味深い言葉が出て来ます。これはパウロが旧約聖書申命記 27:26 のモーセの言葉『この律法の言葉を守り行わない者は呪われる。』民は皆、『アーメン』と言わねばならない。」を引用してその内容を逆説的に伝えようとしているものです。以前にも学びましたが、この時ガラテヤの教会では、パウロが厳しい手紙を書かねばならない事態が持ち上がっていたのでした。

その事態とは、かつて＜救いは信仰によってのみ＞というパウロの教えを受け入れたガラテヤの諸教会の中に、律法の業の重要性を強調するユダヤ主義的キリスト者グループが入り込んだことによってもたらされたものでした。彼らは信徒たちに「主イエス・キリストを救い主と信じてバプテスマを受けるだけでは不十分で、まずは割礼を受け、律法の業に励んだ上で福音信仰に入るべき」と主張、それをユダヤ人のみならず異邦人の信徒にまで強要しようとしていたのです。救いの条件として信仰と同じレベルで律法の業を並べ、しかもそれを信仰よりも先んずるものとしている……。激昂したパウロは「我々キリスト者はただ信仰によって生き、信仰によって神の前に義とされた。このことこそが神の恵みであり、その恵みによって我々は生かされているのである。」と激しく反論したのです。

サウロと呼ばれていたパウロ、彼はかつて律法を何よりも大事に考える人々のトップにいた人でした。「わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非の打ちどころのない者でした。」(フィリピ 3:5-6) とパウロ自身が語っています。そのようなパウロが復活の主イエスと出会い、神の前で義とされるのは、律法によるのではなく信仰によるのであることを知らされたのです。律法の人から信仰の人への大転換でした。パウロは「しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。……わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。」(同 3:7-11) と続けています。信仰によって義とされ、キリストにあって生きると、それこそが神の祝福に与ることであると知ったパウロは、律法の支配と呪いから解放されたのでした。

今日のパウロのガラテヤへの手紙の中で、特に重要なのは「キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださいました。『木にかけられた者は皆呪われている』と書いてあるからです。」(ガラテヤ 3:13) というところです。木にかけられた者とは、石打ちなどで処刑された罪人が見せしめのために木にかけられることを言うのですが、ここでは十字架の死を遂げられた主イエスを指しています。

十字架にかけられて亡くなられたイエス、それは紛れもなく律法の呪いを受けた犯罪者としての死でした。復活の主に出会うまでのパウロにすれば、そんなイエスがメシア・救い主であろうはずはなく、キリスト者や教会は滅ぼすべきもの以外の何ものでもなかったのです。しかし、教会迫害のために急ぐ途上で復活の主から啓示を受けたパウロは、＜十字架の真実＞は、もっと深いところにあることを知ることとなったのです。すべてを理解したパウロは、主イエスが律法の呪いで十字架上で亡くなられたのは、メシアとして律法の呪いをその身に受けられたのであったこと、それによって律法の呪いは全くその力を失い、我々人間は律法の呪いも支配も受けることなく、主イエス・キリストを信ずる者として救われることになったと語っているのです。また宗教改革を行ったルターは、ガラテヤ書を説き明かした大著の中で、＜キリスト教信仰の教理の中心＞は、今日の聖書箇所にあると記しています。

キリストは、私たちが律法の呪いから贖い出してくださいました。＜贖う＞とは市場で物を買うということです。私たちは自ら代価を払ったのではなく、主イエスが律法の呪いを受け、犯罪者としての屈辱的な死を十字架で遂げることによって、私たちの代価を払ってくださったのです。ですから神の前に義とされ、神の子とされるのは、ただただ一つ、＜主イエス・キリストへの信仰によってのみ＞なのです。

(説教要約 羽入田悦子)